

次代を切り拓く福島県内企業

加藤鉄工

加藤鉄工(福島市、加藤孝之社長)は、省力化機械や水処理関連機器をはじめとした産業機械の開発・設計・製造・販売を一貫して手がける。

下水処理や一般産業排水処理で自語を起さす浮遊固形物を除去できる流水除塵機「加藤式自動パースクリーン」が主力。1971年に商品化し、自治体の下水処理場や食品加工工場、製紙工場、皇居のお堀など幅広い採用実績を持つ。

同社はこれまで省資源を重視したモノづくりを展開してきたが、今後もこの姿勢を貫き、環境保全へのさ

省資源重視のモノづくり貫く

加藤鉄工は、事業で安定した生産体制と、確かな品質を提供できる土台を着実に固めていく」と加藤社長は方針を示す。

社員が自ら手を動かして作り上げた製品が、十数年後の更新期までノントラブルで稼働し、社会インフラを支え続けるケースも多い。加藤社長は「良い製品が確かなパフォーマンスで恩返しをしてくれる」と語り、今後も顧客との信頼関係やモノづくりの質を大切に

加藤鉄工が展開する水処理関連機器



北日本金型工業

北日本金型工業(福島県会津若松市、小椋庄太社長)は、本社敷地内に樹脂成形工場として2棟目の「クリーンルーム成形工場」を現在建設中。12月の完成予定で、需要の高いディスプレイ・サポーター(使い捨て)の医療・衛生用品や光学部品、半導体関連部品といった高付加価値品の成形・組立工場として機能する。

国内の金型メーカーが減少する中、同社の大きな特徴は一つの拠点で樹脂製品の金型と成形の両方に対応できること。「問題解決に」つなげやすいことから顧客の技術者に喜ばれている」と小椋社長は言う。

クリーンルーム成形工場建設

拠点が1カ所にあるだけでなく、金型と成形それぞれの事業部門の連携強化も進める。金型の設計担当者も成形品の試作・量産立ち上げまで行い、成形担当者も社内ユーザーとして改善点を金型部門にフィードバックする。

さらに品質・生産管理部門などの社員も各機キャリア検定のほか、成形の国家技能検定を受験するなどスキルシェア、ナレッジシェアにも力を入れる。「社内に金型と成形の両方があることが、金型のための型作りはしない。環境やニーズの変化に素早く対応し、樹脂部品のトータルメーカーの意識でモノを作っていく」と小椋社長は力を込める。

北日本金型工業の現在の成形工場



日東紡

ガラスクロス新工場棟を建設

日東紡は電子材料やメデイカルなび事業を展開する。主力となる電子材料事業では、電子材料用途のガラスクロスを開発・製造・販売し、特に低誘電・低熱膨張といった特性を持つ独自組成のスペシャルガラスは高い評価とシェアを誇る。

現在は、近年のAI(人工知能)・サバー市場の盛り上がりに伴うスペシャルガラスへの旺盛な需要に対応するため、生産能力の拡充に注力。150億円を投じて福島市内でガラスクロスを製造する新工場棟の建設を進めており、2027

年1-3月の稼働開始を目指す。これにより100人規模の雇用創出を見込んでおり、地域的重要課題事業創出センターでは、ヒトとコンパニオンアニマル双方の健康課題に着目。オーブナイノベーションを通じて、スマートフォンの活用で自宅から猫の腎臓・膀胱の健康度をセルフチェックできる製品・サービスを販売するなど、既存の電子材料やメデイカルの枠を超えた新たな挑戦も加速させている。

スペシャルガラスの一つであるガラスクロス

